

CONTENTS

- 特集・1
〈画家〉を描いた映画
- 作品との出会い
- 特集・2
〈芸術〉映画の普及を目指して
- シネマ将軍の作品紹介

IMAGE LIBRARY NEWS

MUSASHINO ART UNIVERSITY IMAGE LIBRARY

●● 99年9月 創刊号 ●●

特集 1 〔画家〕を描いた映画

これだけは見てほしい6作品

■イメージライブラリーの活用法

武藏野美術大学のイメージライブラリーは今年で7年目を迎える。年々利用者は増え、昨年度は7158件の貸出があり、視聴も含めた来館者数は18000人に及んでいる。これは現在のイメージライブラリーのLDやビデオの総数(3700タイトル)からすると驚くべき利用者数である。

今後、美術の諸ジャンルを学んでいる人たちがさらにイメージライブラリーを多方面にわたって活用するためには、劇映画のジャンルにもっと深く踏み込んでもらいたい。たとえば、絵画や画家について調べるとしよう、まず、イメージライブラリーに入り、LDやビデオが並んでいる棚の一角に行くと、美術館のシリーズや画家名のタイトルのシリーズなどが眼に入るが、それしかないわけではなく、背後の劇映画のソフトの中にもその関連がかなりの数あるのだ。1960タイトルもある劇映画の中から目的のものを探し出すには、キーワード検索で「画家」を入力すると、現在で46タイトルが現れる。今回は、その中でもこれだけはぜひ見てもいいたいと思う作品を6つ選び紹介することにしよう。

■描かれた画家の映画

想像上の画家だからこそ、実在する画家によるよりもはつきりと、画家を制作に駆り立てるものが何か、を示し得ていることがある。ジャック・リヴェットの『美しい静けい女』(1991)は、それを画家の手と描く音で体験させてくれるのだ。物語は、「画家フレンホーフエルが10年前に制作を中止した『静けい女』の絵を、若きマリアンヌをモデルとして再び描きはじめることを決意して、漫しペントインク、そして木炭、と口を追つて手にするものを変えながら描いていき、油彩によつて仕上げていく5日間の出来事である。特に1日目の漫しペントインクによるデッサンの手と音には圧倒的な存在感がある。この手を演じているの

は、40年代から活動している現存する画家ベルナル・デュフルである。10年間制作活動を休止していた画家は、重い水彩色紙を綴ったスケッチブックを前に、「始めは何でもいいんだ。ともかく描きはじめよう」と自分に言い聞かせる。そして、いきなり、節くれだつた力強い手は、ギイツ、ギイツ、シャキシャキシャキ、と勢いよく紙を引つ掻いていく。そこへ、たっぷりすぎるほどの水を筆で流し、またその上を、ギーイー、ギーイー、ギーイー、と。その音、その素早さは、

描くというよりも、見かけの内面にあるものをつかみだす作業そのものだ。この手と音だけの30分間にも及ぶシーケンスは劇映画の枠組みを超えている。その音が映画を見終わっても、そして今でも耳に残っているのだ。劇中のミシェル・ピコリが演ずる画家フレンホーフエルの台詞で、「まるで指がものを見て、独りでに動くかのようだ」は、マチスが記録映画の自分の手を見て、「手は別の生き物」と言ったこととつながるだろう。この手と音の織り成す時間の体验によって、3時間59分という上映時間がほんのひとときと感じてしまう、不思議な映画だ。

ベルトラン・タベルニエの『田舎の日曜日』(1984)の場合には、画家のいる空間—庭とアトリエの緻密な表現によって一人の画家の人生に触れさせてくれる。ここで描かれる初老の画家ラドミラルは、『静けい女』の激しい気性の画家とは異なり、迷いながらも、たんたんと描き続けてきた画家である。この画家の人生について、ラドミラルがセザンヌやゴッホのようなオリジナリティをもてなかつたこと、最近も絵の手法を変えようと、この年で迷つてこと、それでも

自分の感するままにしか描けないこと、娘のイネヌに語る以外は言葉で説明されることはない。後は庭とアトリエの空間が語っているのである。1912年の初秋のパリ郊外の画家の家。日曜日の午後の陽光を浴びて樹木が美しく輝く庭。そこで無時間的に持続する時を捉えた見事な映像によって、この老画家のように描きつづけてきた者だけがもてる特別な〈場所〉に触れる思いがする。一方、アトリエの空間は最後の5分間のシーケンスで立ち現れる。劇中、やがて死を迎えることが幾度か暗示されている画家は、日曜日の午後の庭に訪れた息子の一家や娘が去つた後、ひとり離れるアトリエに入る。小さな明かりの中で、画家は描きつづけてきた手を見つめ、立ち上がり、アトリエの空間と白いショールが掛けられた赤いソファの絵



『美しい静けい女』より “デュフルの手”

を見つめる。そして、その絵を片付け、新たな制作のための白いキャンバスを置き、そのキャンバスを窓に向か、赤いソファに座りながら、白い面を見つめる。それに重なるように、この画家が100枚以上も描いてきたいつもの午後の庭の風景が拡がり、ここで突然、映画は暗転して終わる。この映画はこの5分間のシーケンスのためにあると言つてもよいだろう。この画家がいるアトリエの空間にすべての世界の拡がりまで見る思いがする。

てヴィンセント・ヴァン・ゴッホを照射する方法をとっているからであろう。ヴァン・ゴッホの生涯は、書いた人の数だけ様々なイメージを作り出している。

ができない向きには、「ゴッホこの世の旅人」(アルバート・J・ルーピン)講談社、「ゴッホの生涯」(アンリ・ペリュシヨ)紀伊國屋書店、「ゴッホの手紙下(テオドル宛)」(J・V・ゴッホ—ボンゲル編)岩波文庫、「ヴァン・ゴッホ—社会が自殺させた者」(アントナン・アルトー)ちくま学芸文庫、などを併せて読んでいただくのがよいだろう。この映画には、ヴァン・ゴッホがパリの時代(1886~88)に通つていたフェルナン・コルモンの画塾でのエピソードも挿入されている。時間を忘れて、描くことに熱中しているヴァン・ゴッホを、傍らでエミール・ベルナールが描いているシーンである。ヴァン・ゴッホはこの時代のコルモンの画塾やモンマルトルのカフェ・タンブランなどで、アンリ・トゥールーズ=ロートレックという友人も得ている。

ロートレックの映画としては、ジョン・ヒューストンの『赤い風車』(1952)が有名である。映画の中のムーラン・ルージュでは、ロー・トレックの有名なボスターと絵画に描かれている専属の芸人で特徴あるまげを結ったラ・グーリュと呼ばれる踊り子や、ちょっと四角いあごのモム・フロマージュが踊り出し、フリルのついた下着をひらめかせている。そして、骨なしヴァランタンの特徴的な姿も現れる。ロートレックは傍らのテーブルで酒をあおりながら即興的にスケッチしている。このようなロートレックの絵が動き出したような映像に出会うと、ロートレックの絵画技法—芸人の演技やエッセンスを素早く捉え、それを瞬時に切り取るかのようないは、当時発達しつつあった写真技術のスナップ・ショットである、と思は知らされてしまう。また、ジョン・ヒュー・ストンの『赤い風車』は徹底したしさで表現されている。

ロートレックの少年期の足の骨折による大きな頭と、それとは不釣り合いの小さな体つきも、1890年代のモンマルトルの夜の華やかさや、その背面の混沌とした様子も、すべてらしさで表現されている。

一方、このらしさをすべて排除して、画家の本質に迫ろうとする映画もある。デレク・ジャーマンの『カラヴァッジオ』(1986)はこの好例である。17世紀のローマの街が舞台であるはずなのに、カラヴァッジオを歴史から葬ったパリオーネは浴槽でタイプ・ライターを打つており、遠くで汽車の音も聞こえる。劇中のカラヴァッジオの油絵の描き方も当時のそれではなく、現代的ですらある。だからと言つて、物語をすべて現代に移しかえたわけでなく、バロック時代を暗示する背景も同時に現わされている。つまり、デレク・ジャーマンはどの時代、どの時間にも所属しない裸のカラヴァッジオをわれわれの前に突き付けるのである。そのシナリオは、史実や資料の積み重ねによ



『カラヴァッジオ』より “キリストの埋葬”

るだけでなく、デレク・ジャーマン自身がカラヴァンジオの幾枚かの絵画と向かい合った時の想像力によつて組み立てられている。それだけ

る美術史家や評論家よりも、カラヴァッジョを
見抜いている自信があったのであろう。らしさ
は一切ないが、そこには紛れもなくカラヴァッ
ジオがいる。デレク・ジャーマンはカラヴァッ
ジオの絵画と同質の闇と光を、写真家がよく使
う反射板で再現してくれているだけでなく、絵
画の人物の格好どおりにモーテルの役者をボー
ズさせて、立体絵画を構成して見させてくれる。
これは映画ならではのサービスであり、静止画
に扮している役者たちが細かく震えているのを見
るのは「この映画のもうひとつ楽しみ」である。
特に複雑に組まれた『聖母の死』(160
5—06)と『キリストの埋葬』(1602—
04)は見事である。このような楽しみを与える

作品との出会い

課外講座を通して

■ 現存する画家本人が登場する映画
てくれる映画には、ジャン・リュック・ゴタールの『バッシュ』(1982)におけるレン・ブラントの『夜警』やハイメ・カミーノの『ベラスケスの女官たち』(1988)におけるベラスケスの『ラス・メニーナス』などがある。

だ知 ラリ ば、課 とを

学んでほしいと思います。
外講座で「この作品に出会えてよかったです」と思えたなら
次回は自分の手で作品を取り出してみて下さい。ライブ
にはメジャーもマイナーもひらくめて、皆さんのも
らない作品が沢山あることでしょう。

とを学んでほしいと思います。

課外講座で「この作品に出会えてよかつた」と思えたならば、次回は自分の手で作品を取り出してみて下さい。ライブラリーにはメジャーもマイナーもひらくめて、皆さんのが知らない作品が沢山あることでしょう。

イメージライブラリーでは年間4回程度の映像の課外講座を企画しています。この講座を通じて、すばらしい作品との出会いがあることを期待いたします。

6月17日に開催された第6回課外講座は、『(宇宙)と(天使)』と題し、映像学科の三浦先生に解説を行つていただきま

ロートレックの映画としては、ジョン・ヒューストンの『赤い風車』(1952)が有名である。映画の中のムーラン・ルージュでは、ロー
トレックの有名なボスターや絵画に描かかれている専属の芸人で特徴あ
るまげを結ったラ・グリュヒと呼ばれる踊り子や、ちょっと四角いあ
ごのモム・フロマージュが踊り出し、フリルのついた下着をひらめか
せている。そして、骨なしヴィアランタンの特徴的な姿も現れる。ロー
トレックは傍らのテーブルで酒をあおりながら即興的にスケッチして
いる。このようなロートレックの絵が動き出したような映像に出会う
と、ロートレックの絵画技法——芸人の演技やエッセンスを素早く捉え,
それを瞬時に切り取るかのようないは、当時発達しつつあった写真技
術のスナップ・ショットである、と思われる。また、ジョン・ヒュー
ストンの『赤い風車』は徹底したらしさで表現されている。
ロートレックの少年期の足の骨折による大きな頭と、それとは不釣り
合いの小さな体つきも、1890年代のモンマルトルの夜の華やかさ
や、その背面の混沌とした様子も、すべてらしさで表現されている。
一方、このらしさをすべて排除して、画家の本質に迫ろうとする映
画もある。デレク・ジャーマンの『カラヴァンジオ』(1986)はこ
の好例である。17世紀のローマの街が舞台であるはずなのに、カラ

めることができる映画は、ピクトル・エリセ監督の『マルメロの陽光』(1992)、これ唯一である。現存するスペインの画家アントニオ・ロベス・ガルシア本人が、自宅の小さな庭のマルメロの樹を毎日描いているだけの映画であるが、記憶と夢が、エリセによって巧妙に織り込まれており、今まで映像で描かれたことのなかつた画家の内部の〈場所〉と無時間的な時間を追体験できるのである。子供の頃の『永遠の夏休み』のような幸せな時間に抱かれたくて、映画を見に行くという体験は、私にとっては、はじめてである。

以上、劇映画を「画家」という視点でみてきたわけだが、これは映画で見る「ファンタジー」、「インテリア」、「歴史」、のように展開できる。いずれ機会があつたら、また、とつておきの6作品という形で紹介したい。最近では特に、映画で見る「都市」、「建築」等に関しては多くの資料や本があるので併せて利用されるよといふと思う。

した。「The Origin of the Moon」など、「先生」自身の作品を含めた宇宙に関するCGアニメーション2作は、芸術的観点のみのアプローチではなく、科学的なデータを基にした緻密な計算から作成されたもので、科学と芸術の融合という点が受講者の関心を呼びました。同時に取り上げた実験映像作品「午後の網目」(マヤ・デレン)、「天使」(パトリック・ボカノウスキー)は夢の中を徘徊するような詩的イメージを持つ作品で、難解に感じたという感想もありましたが、映像の美しさ、感覚の斬新さに驚きを持ちインスピライアされた人は多かつたようです。今回上映された作品は全てライブブラーーで所蔵されているものなので、参加しそびれた人、参加したがもつと掘り下げて研究してみたいという人はどうぞライブブラーーを利⽤して下さい。

ヴァツジオを歴史から葬ったパリオーネは浴槽でタイプ・ライターを打つており、遠くで汽車の音も聞こえる。劇中のカラヴァツジオの油絵の描き方も当時のそれではなく、現代的ですらある。だからと言って、物語をすべて現代に移しかえたわけではなく、バロック時代を暗示する背景も同時に現わされている。つまり、デレク・ジャーマンはどの時代、どの時間にも所属しない裸のカラヴァツジオをわれわれの前に突き付けるのである。そのシナリオは、史実や資料の積み重ねによって

した。「The Origin of the Moon」など、「先生」自身の作品を含めた宇宙に関するCGアニメーション2作は、芸術的観点のみのアプローチではなく、科学的なデータを基にした緻密な計算から作成されたもので、科学と芸術の融合という点が受講者の関心を呼びました。同時に取り上げた実験映像作品「午後の網目」(マヤ・デレン)、「天使」(パトリック・ボカノウスキー)は夢の中を徘徊するような詩的イメージを持つ作品で、難解に感じたという感想もありましたが、映像の美しさ、感覚の斬新さに驚きを持ちインスピライアされた人は多かつたようです。今回上映された作品は全てライブブラーーで所蔵されているものなので、参加しそびれた人、参加したがもつと掘り下げて研究してみたいという人はどうぞライブブラーーを利⽤して下さい。

日本語
課外講座を通して

〈芸術〉 映画の普及を目指して

ここでは、近代日本映画史において重要な位置を占めるATGについて、その辿ってきた道のりと功績について簡単に述べようと思う。

53年にNHKはテレビ放送を開始したが、テレビの普及率はまだ低く一般庶民の娯楽はまだ映画であった。この時期、大手映画会社は大量の娯楽映画を作成し直営の映画館で上映。二本立てというスタイルがテレビ放映されることとなり、テレビの販売台数は急激に伸びた。さらに64年の東京オリンピック開催にあわせカラーフラッシュも開始。テレビの普及率に加速をかけた。この流れに押されるように日本映画は衰退の一途をたどつてゆく。

大衆の娯楽がテレビへと移行しつつあるこの時期、

それでも日本映画界では娯楽作品が主流で、非商業的ないわゆる芸術映画が紹介される場はなかった。そこで、若い映画人たちが集まつて、日本にも欧米のような芸術映画専門館をつくろうという動きが活発となる。そして「日本アートシアター運動の会」が発足した。東宝などいくつかの映画会社からの資金援助と劇場の提供を受け、全国に十館の加盟館を持つ「日本アートシアターギルド(ATG)」が誕生する。第1回の上映は1962年、作品はイエシ・カワレロウイツク監督の『尼僧ヨアンナ』であった。この作品選定の方法がユニークで、選定は主に映画批評家によつて構成された作品選定委員会が行つた。つまり、いくら興行的に成功しそうな作品でも委員会の厳しい審査によつて「芸術」映画と認められなければ上映されないのである。このようにして今までの日本では絶対見られなかつたような珠玉の名作が次々と紹介されていつた。

60年代の半ばになると、アングラーブーム、ベトナム反戦デモなどで、新宿は活氣づいた街となる。新宿を拠点としていたATGの直営館にも、自然と若い芸術家たちが集まり一種のサロンとなる。この勢いに乗つて、これまで外国映画の配給を主におこなつてき

たATGが、今度は製作を始める。予算は映画製作としては破格の、一千万円という低予算である。企画は先の作品選定委員会で審査され、通過てしまえば作

品に関して一切口出ししないという、作家を尊重したシステムであつた。低予算という制約の中でのいかに表現をしてゆくか。この制約は逆に質の高い作品を生み出し、また痛烈な社会批判をも可能とした。当時、松竹と衝突して制作の場を失つていた大島渚が最初のATG製作で『絞首刑』(68年)を制作した。

70年代は、吉田喜重、篠田正浩、新藤兼人、寺山修司などが次々とATG映画を制作。しかしそれもやがて行き詰まつてくる。どんな監督も所詮予算では

長く続かない。大島渚は当時を振り返つてこんな発言をしている。「本当にお金があつて、映画は剛球を投げるのがいちばんいい。ところがATGというのは金がないのがいちばん悪い。ところがATGというものは金が

ない、コナーアーをつくるのをつくら大手アーチャーなんというのを連投してると、肩がいたんでくる。僕は本当に肩が力

タガタになつた。」(*1) たいていの監督が大きな製作費を求めてATGを去つていくなか、新人監督を取つかえひつかえしながら、ピンク映画などの違うジャンルからの監督を发掘したりと工夫を重ねるが、

興行的には失敗が続く。しかしこれはATGに限つたことではない。映画界全体が斜陽の中で必然的だつたといえる。その後も映画館の入場者数は減少を続け、80年代に入つて完全にその地位をテレビに譲ることとなる。

さて、近代日本映画の中でのATGの歩みを駆け足で辿つてみた。娯楽映画中心であった時代に、芸術映画の普及と認知を理想としたATGの誕生はまさに時代が必要とした訳だが、その衰退もまた時代の必然性であった。しかし現在、アートシアターやミニシアターはいたるところにあり、ほぼ毎日どこかで名画の上映や特集が組まれている。低予算のインディペンデント映画が、国内外で高い評価を得ることもある。映画の、娯楽としての地位はテレビに譲つたとしても、

芸術としての地位は確固たるものになつた。このようないくら興行的に成功しそうな作品でも委員会の厳しい審査によつて「芸術」映画と認められなければ上映されないのである。このようにして今までの日本では絶対見られなかつたような珠玉の名作が次々と紹介されていつた。

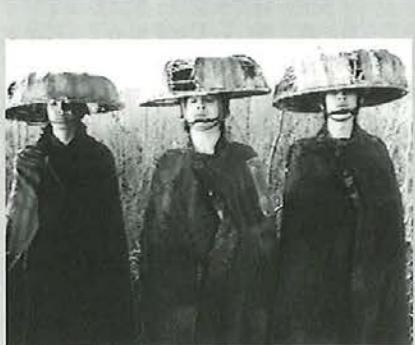
参考文献 〔ATG映画を読む〕 佐藤忠男編 フィルムアート社

*1 「日本映画五十年史」 塩田長和 藤原書店 〔月刊・イメージフォーラム〕 創刊準備号

ATG製作で『絞首刑』(68年)を制作した。吉田喜重、篠田正浩、新藤兼人、寺山修司などが次々とATG映画を制作。しかしそれもやがて行き詰まつてくる。どんな監督も所詮予算では

邦画	
心中天網島	1969
地の群れ	1969
薔薇の葬列	1969
修羅	1970
書を捨てよ町へ出よう	1971
寺山修司	
歌舞	1972
夏の妹	1972
戒嚴令	1973
東弥呼	1973
股旅	1973
田園に死す	1974
鳴馬暗殺	1974
黒木和男	
中平康	
変奏曲	1975
祭りの準備	1975
長谷川和彦	
黒木和男	
市川崑	
寺山修司	
吉田喜重	
大島渚	
新藤兼人	
寺山修司	
熊井啓夫	
松本俊夫	

洋画	
戦艦ポチョムキン	1925
セルゲイ・エイゼンシュテイン	
アレクサンドル・ネフスキ	1938
市民ケーン	1941
オーラン・ウェルズ	
もだえ	1944
アルフ・シェーベル	
イワン・雷帝	1946
サタジット・レイ	
女ともだち	1956
ミケランジェロ・アントニオーニ	
大河のうた	1956
サタジット・レイ	
第七の封印	1956
イングマール・ベルイマン	
愛のレッスン	1954
サタジット・レイ	
青島の殺人者	1976
長谷川和彦	
サード	1977
東陽一	
新・人間失格	1978
吉留敏平	
もう煩づえはつかない	1979
東陽一	
ツイゴイナルワイゼン	1980
鈴木一順	
ヒックラテス	1980
ミスター・ミセス	1980
ロンリー	1980
ミスター・ミセス	1980
神代辰巳	
ガキ帝国	1981
大森一樹	
風の歌を聴け	1981
近頃なぜかチャーリーストン	1981
岡本喜八	
軒校生	1981
大林宣彦	
TATO	1981
刺青	1982
伊丹十三	
高橋伴明	
家族ゲーム	1983
森田芳光	
キッドナップ	1983
浅井慎平	
お葬式	1984
伊丹十三	
逆噴射家族	1984
石井聰互	
ささら箱船	1984
寺山修司	
生きているうちが花なのよ死んだら	1985
森崎東	
野ゆき山ゆき海へゆき	1986
大林宣彦	
砂の上の口	1989
ビンソン	1989
すずきじゅんいち	
二十歳の恋	1982
二十三の恋	1983
僕の村は戦場だった	1982
小間使いの日記	1984
眞実の瞬間	1983
火の鳥	1964
バサジエルカル	1963
アルファヴィル	1965
ミユリエル	1963
小間使いの日記	1964
火の鳥	1964
バサジエルカル	1963
アルファヴィル	1965
ミユリエル	1963
アンドレ・タルコフスキ	
フランチエスコ・ロージ	
エドリコ・エリコ	
セルゲイ・ムンク	
フエデリコ・フェリーニ	
アン・レネ	
アン・リュック・ゴダール	
クリス・マルケル	
ブルジョワジーの密かな愉しみ	1972
ボギー！俺も男だ	1972
ハーバート・ロス	



『股旅』

「ピロスマニ」

画家を描いた映画で心の底から振り動かされたものといえば数える程だ。「実際の画家とはどこか違う。こんな風にはしないだろう。」と思ってしまう。まるで画家はみんなこうしたものだと、類型化したとらえ方があるようだ。いろいろな画家がいて、その数だけ生き方があるのに納得できないのだ。

こんな中で映画『ピロスマニ』は長い長い影を投げかけている。最初に観て二十数年も経つのに、気になつて又観たくなる。

ピロスマニのみつめるまなざし、市井の人々や動物たちへの共鳴はこの画家の絵画が根ざしているものだ。彼の描く動物たちは一見素朴である。だから下手な絵に似ている。だが一度観て忘れられない。そこには自然への語りかけが含まれているからであろう。

漂う悲しみはこの画家の生き方からきているのではなく、見方からきている。そのために昏く深い、それに美しい。誇り高いこの画家は絵の世界では何に対しても屈することができなかった。たとえ無理解と貧困のうちに世を去ることとなつたとしても。

「おれは今までどおり描くだけさ、手本など必要ない。心にひらめくままだ。内なる欲求が、さあ描け、とおれを動かす。」

絵に登場する人物たちも動物たちもいっぱいに眼を見開いて、こちらを見つめ、問いかけている。

「そうじやあないのか。」と。

監督シェンゲラーヤは画家ピロスマニを通して二十世紀始めのグルジアのあり方や民族の思いを伝えている。ピロスマニを演じるワラジは、実生活でも造形家で、時折ピロスマニ自身に思えてしまう。まるで数年後、世を去ることとなる自分の行き末をピロスマニの役に委ねているようだ。

観終わって哀しい気分とともに不思議に清々しいのはこの映画が一人の画家を描き切っているからであろう。

(薮野健)

作品データ

1969年 ソ連 87分
監督／ゲオルギー・シェンゲラーヤ
俳優／アフアンジル・ワラジ
ボリス・ツイブリヤ 他



執筆者＋スタッフ

板屋リョク一 映像学科 教授
薮野健一 画家・映像学科 講師
下川久美香
狩野志歩
木村美佐子
田中友紀子



「サン・ロレンツォの夜」

サン・ロレンツォとはラテン語でラウレンティウス(Laurentius)と呼ばれる施しの聖者として有名なローマの殉教者である。そして8月10日は、その聖者に与えられた祝日とされている。

物語はトスカーナ地方のある母親が、愛する子供に「言い伝えでは(サンロレンツォの日の夜)流れ星が願いをかなえるの」という子守歌のように聞かせる昔話で始まる。

時は、母親がまだ6歳であった1944年、終戦間近の8月のイタリアの小さな村での出来事である。ローマを解放して北上しつつあるアメリカ軍と、村を爆破しながら撤退しようとするドイツ軍ファシストの進行によって、小さな村は二つの運命に分かたれてしまう。一方は軍の命令に従い教会に残り、他方はアメリカ軍を探す放浪の旅に出るという、愛し合うもの、家族を二つに引き裂く選択を余儀なくされる。

オメロ・アントヌッティ演じる長老は、脱出の道を選んだ村人の半数を率い、教会に残ることを拒み、命がけで村を出て行く。その様は聖者ラウレンティウスがウラリエヌス帝の迫害を受け、教会の宝を引き渡すよう命じられた際、貧しい人々を集め「これが宝だ」と答えたという逸話が思い出される。

村人が戦争の影におびえながらも、夜中に聞く爆弾の音を待ち遠しく思ったり、我が家が爆破されはしないかと案じる独白のシーンもまた「爆破されてゴキブリがいなくなつていまえばいいのに」と非常事態の人間の心理がユーモラスに表現されている。そして少女は、まるでピクニックにでも出掛けるような、いやそれ以上の冒険の“特別な毎日”に胸を躍らせている。

トスカーナ地方の人々による家族ぐるみの出演で素朴さの漂う中、オメロ・アントヌッティ演じる長老と、マルガリータ・ロサーノ演じる老婦人の描写が見る者の心を強くとらえ、物語をより一層魅力的に仕上げている。彼らはタビアーニ監督の次回作『カオス・シチリア物語』にも欠かせない俳優である。

戦争を知らない世代にとって、海の向こうの国家と国家によるハイテク兵器の戦争よりも、ショーやミュレーション・ゲームを見ているようなマスコミの報道よりも恐ろしい戦争がある。死者がたとえ少数であったとしても、自らの手で、昨日まで愛する隣人の一人を殺してしまうことを正義とする愚かしさに眞の戦争の恐ろしさがあると痛感させられる作品である。

(下川久美香)

作品データ

1982年 イタリア 107分
監督／バオロ&ピットリオ・タビアーニ
俳優／オメロ・アントヌッティ
マルガリータ・ロサーノ 他